

研究ノート

## 野外教育の源泉としての「自然」について考えるⅡ —生き物としての適応の観点からみた幼児期の自然体験—

An Essay: Nature, the Source of Outdoor Education II : Early Childhood Nature-Based Experiences  
As adaptation of Organisms

遠藤 知里<sup>1)</sup>

ENDO Chisato

<sup>1)</sup>常葉大学短期大学部保育科

### 要旨

本稿の目的は、生物と人間との関係の在り方から、野外教育の源泉としての「自然」について考察することである。まず、自然界における根源的な事象、野外教育の源泉としての「自然」、受け取るものとしての「身体」との関係を一覧表として整理した。さらに、それを手がかりとして、野外教育活動場面における生き物と人間の身体との関係創出について、幼児のキャンプでの具体的事例を取り上げて検討した。この試みを通して、幼児の原体験的自然体験の理解に「適応」の観点を導入するという着想に帰結した。今後は、幼児の原体験的自然体験について、生態学的な観点での考察を深めていきたい。

キーワード 野外教育の哲学 身体と自然との関係

### 1. はじめに

本稿は、常葉大学短期大学部紀要 54 号所収の「野外教育の源泉としての「自然」について考える」（遠藤，2023）の続編である。以下、これらの論考をまとめるに至った経緯について、簡単に触れておく。

土方・張本（2023）は、日本野外教育学会第 26 回大会（2023 年 7 月、北海道教育大学岩見沢校）で、野外教育のプラットフォーム原則として、「源泉としての自然に帰属」、「身体を介した直接体験」、「多様な教育と学び」の 3 点を提示したが、これに導かれて、筆者は「自然を源泉として、人が内的な自己を開発していくプロセス」を整理しようという動機を得た。そこで本稿では、生物と人間との関係の在り方から、野外教育の源泉としての「自然」についての考察を試みる。

まず、前掲の遠藤（2023）での検討を発展させ、自然界における「根源的な事象」、野外教育の源泉としての「自然」、受け取るものとしての「身体」との関係の整理を試みた（表 1）。このように、自然と身体は、知覚・作用・意味生成の連関によって、人間の周辺にさまざまな関係を創出している。野外教育は、自己・他者・環境の関係を学ぶ教育であり、自然は野外教育の源泉といえる。

表1 試論 野外教育の源泉としての「自然」と、受け取るものとしての「身体」

根源的事象	受け取る身体	源泉としての自然	例
物体 (+光の波長)	眼	見える自然	観察、鑑賞、展望
物体 (+物体の振動)	耳	聴こえる自然	風の音、会話
物体 (+物質)	舌・鼻	味わう自然・匂う自然	山菜採り、薬草
物体 (+温度)	皮膚	肌で触れる自然	感触、痛み、寒暑
物体 (+物質)	呼吸器・消化器	身体に取り込む自然	呼吸、食事
日常と異なる生活環境	自律神経系	普段と違う自然	緊張、興奮、リラックス
暗闇、水中、濃霧、吹雪、暴風雨、雷鳴、滝の轟音等、視界や音環境が通常とは異なる環境下で、身体が環境から何かを確かに受け取り、意味生成や洞察につながる体験が生じる場合がある。		知覚世界と作用世界に存在する自然事象全て	暗闇、静寂、孤独 人とのつながり 自然とのつながり 自然への畏敬
ヒトの身体活動	意識・身体	資源としての自然	エネルギー資源、農林漁業
ヒトの身体活動	意識・身体	思い出に残る自然	原体験、原風景、故郷
ヒトの身体活動	意識・身体	おのずからそうなる自然	自然ななりゆき
地球 (+太陽、月、星) +ヒトの身体活動	意識・身体	循環・反復する自然	四季、一日、一年
生物であること	身体	引き継がれる自然	生まれる、死ぬ

しかし、この試みでは、生物（有機体）である人間の身体と、無機的な自然物との相互作用という事象を検討したに留まっている。野外教育の現場の実感としては、有機体と有機体の関わり、すなわち「生き物的な文脈」のほうが、総合的に見た場合の理解のしやすさがあるようにも感じられる。なぜなら、人間が生き物だからである。そこで、本稿ではその前提に立ち、自然物の中でも「生物（有機体）」に注目して、野外教育の源泉としての「自然」について考える。

## 2. 生命という「自然」

### 1) 生命のはじまり 生物とは何か

以下、生命という「自然」について、関連する領域での一般的な言説を概観していく。地球は約46億年前に誕生したが、はじめての生命は約35億年前に海の中で誕生したと考えられている。細菌が生まれ、光合成をして酸素を出すようになった。こうして大気中に酸素がたくわえられ、地球は生物が暮らせる環境となった。生命を持っているものを、生物という。生物とは一般に、外界と膜で仕切られていて、代謝（化学反応によってエネルギーを取り込み不要物を排出すること）を行い、自己複製するものことである。生物について、動物か植物かという捉え方が一般的であるが、真核生物、細菌、古細菌の3つのドメインに属するものを生物という。なお、動物、植物、キノコ、カビなどは、真核生

物である。また、ウィルスは、先述の生物としての定義を満たさないので、生物と非生物の中間的存在とされている。

## 2) 生態系（エコシステム）

「生態系」とは、食物連鎖などの生物間の相互関係と、生物とそれを取りまく無機的環境（水、大気、光など）の間の相互関係を総合的にとらえた生物社会のまとまりのことを示す概念である。つまり、生物はお互いに影響を与え合っている、持ちつ持たれつである、という、関係で成り立っているという考え方である。生態系とは、生物の生活の共通性と多様性に共時的に着眼して、今ここに成り立っている生物界の持続可能な相互作用の仕組みを理解する枠組みと言える。

## 3) 生命のサイクル・リズム・共振

ところで、生物に組み込まれている性質として、ライフサイクル（生活環）を持つことが挙げられる。ライフサイクルとは、生物が発生し、次の世代に生殖細胞を引き継ぐまでの一区切りのことである。しかし、人間のライフサイクルと言えば、生まれてから寿命が尽きるまでの生涯発達のことを想像する人が多いであろう。また、生物は細胞レベルの生命現象にもとづくリズムを持ち（たとえば心臓の拍動はそうであるし、単細胞生物の繊毛運動もそうである）、群として同調や共振の動きを見せることがある。ホタルの明滅、魚の稚魚（ゴンズイなど）の動きなどは観察しやすい共振であるし、スポーツ観戦やライブなどで何万人ものヒトが共振する姿も身近なものである。

## 4) 生きることと動くこと

人間は、本能とは関係なく、意志を持って方向を定めて進むことができる。人類の起源については諸説あったが、現時点では約700万年前のアフリカとする説が有力である。現生人類であるホモ・サピエンスは、7万年ほど前にアフリカから移住をはじめたと考えられるが、アフリカ東端からアラビア半島を経て南へと移住したもの、北へと移住したもの、西へと移住したのがあり、アフリカから移住しなかったものもあった。こうした移住が、当時のホモ・サピエンスの本能によるものか意志の働きかは今や知る由もなく、自然のなりゆきだったのではないだろうか。環境の探索と行為の遂行という、人間の自然な行為による自然のなりゆきである。

## 5) 共主体（Co-Agency）としての生命

ところで、人間の主体性は個人の意志に基づくところが大きいと考えるのが、一般論としては自然であろう。一方で、生物の主体性は生物そのものが元来有している自立性に端を発し、進化してきたという考え方もある（トマセロ,2023）。生物は、その個体（あるいは集団）が残せる子孫の数を最大にすることが生きる上での最大の目的であり、それを目指して行動するのが生物の特性である。とはいうものの、協力行動や互惠的行動、互惠的利他行動を行う生物は、案外多く存在する。つまり、生物の特性の一部として協力行動があるのであって、人間固有のことではない。ただし、その互惠性や利他性に価値

や意味を見出すというのは、人間の特性である。

OECDが2015年から推進しているEducation2030 (Future of Education and Skills 2030 project)では、「共主体 (co-agency)」という概念が示された (OECD,2015 ; 白井,2020)。共主体 (co-agency)とは、「他者と協働して発揮される主体性」のことであり、人間が持つ生物としての特性に相応しい。

### 3. 野外教育の源泉としての自然

#### 1) 共振する自然と身体

さて、身体はどのようにして自己と自然との関係を創出しているのでしょうか。そのプロセスへの注目は、野外教育的な発想であり、遠藤 (2023) から継続する本稿の中心的な問題意識を再掲する。

私たちの身体は、感覚受容器で自然を知覚し、筋肉を動かすことで自然に働きかけている。このことは、ユクスキュルが考えた環世界の構造 (ユクスキュル,1995) にも良く表されており、生命を持つ生物に共通する、世界との関係創出の技法と言えらる。一方で、人間の知覚と運動は、外界への働きかけのみに留まることはなかった。人間の感性と知性は、知覚と運動によって自分自身の中に豊かな内的現実をもたらし、価値や意味を生成するに至った。人間は、価値を言葉に変換することにより、自己内で解釈の反復を重ねて新たな意味を生み出すことを可能にした。また、言葉で他者に伝えることは、他者の内的現実に影響を与える。これは、人間にとって一般的な環境との関係創出のプロセスであり、それゆえに人間にとっての環境は人間関係を含むものとして成立する。(遠藤, 2023)

#### 2) 事例を通して考える 源泉としての自然

上述の問題意識に基づき、本稿では野外教育プログラムを事例として、自然と身体による知覚・作用・意味生成の連関について考察していきたい。ここでは、幼児を対象としたキャンプでの「ヒキガエルと幼児とのかかわり」のストーリーを提示し、そこで子どもが経験することについて検討する。

##### ① 事例の背景となる野外教育プログラム「とことこキャンプ」について

筆者は、幼児～小学校1年生を対象とした野外教育プログラム(キャンプ)である「とことこキャンプ」を主宰し、本学の短期大学部保育科の学生、保育学部保育学科の学生と共に指導に当たっている。なお、本稿で取り上げる事例は、すべて筆者が主宰する「とことこキャンプ」での出来事に基づき、適宜編集したものである。

以下、とことこキャンプのねらいを述べる。とことこキャンプには、野外教育の指導者養成としてのねらいと、幼児の野外教育活動としてのねらいがある。

学生を対象とした指導者養成プログラムとしてのねらいは、以下のとおりである。

- ・保育を学ぶ学生がその資質と保育の学びを善用し、自己を開発する。
- ・子どもたちと自然の中で共に生活をするを通して、自然環境の本質を知り、子どもの自然な姿を知る。

・大学/短大での保育の学びを、キャンプ指導に活かす。

また、幼児を対象とした野外教育プログラムとしてのねらいは、以下のとおりである。

- ・野外でのあそびを十分に楽しみ、自然の美しさや不思議さを味わい、心が動く体験をする。
- ・さまざまな活動に挑戦し、やってみたいことを満足するまでやりつくすことの充実感を味わう。
- ・自然の中での生活を仲間とともにすることを楽しみ、安心できる人間関係の中で自己を表現する。

本学草薙キャンパスが開設された2018年、静岡県立朝霧野外活動センターの全面的な協力のもと、保育学部今村ゼミ4年生のリーダーシップに助けられ、保育学部生と短大保育科学生とのコラボレートにより、はじめてのとことこキャンプが行われた。翌年以降も毎年継続しており、今年で6年目を迎える。現在も、短期大学部保育科レクリエーション論/レクリエーション援助法受講学生と、保育学部今村ゼミの学生、その他有志の学生が、キャンプカウンセラーとしてとことこキャンプの指導にあたっている。学生自身が、「保育で大切にしたい」と思うところを、キャンプの指導を通して（保育とは異なる野外教育プログラムの文脈の中で）自然な形で実践できることが、本プログラムの特徴である。



写真1 子どもと生き物（左:セミの抜け殻を集める、中央:ヒキガエル、右:生き物を見つける子ども）

さて、とことこキャンプでは、子どもたちと生き物とのかかわりの様子を、つぶさに観察することができる。一部の子どもたちは、キャンプの生活の中で、生き物を見つけてつかまえることを楽しみにしている。とことこキャンプでは、参加の際に提出する健康調査票の中に「好きなこと、キャンプでやってみたいこと」を記載する欄を設けているが、そこに「虫取り」が記載されていることは目に留まる。事実、虫取り網、虫かご、プラスチックの小型飼育ケース等を、キャンプ当日に持参する子どもは少なくない。ところで、子どもたちは期待通りに虫や生き物に出会えているのか。近年のとことこキャンプでは、野外でのキャンプ生活を中心に置き、いわゆる一斉活動的な内容を極力少なくしている。なぜなら、確かに一斉活動には豊かな体験をもたらす側面もあるが、キャンプカウンセラーの力量に依存する部分が大きいため、一定の質を保ちにくく、指導が難しいからである。一方で、「野外での生活と遊びを、

子どもの時間の流れに合わせて行っていく」ことを中心にすると、学生の指導力の差にかかわらず、子どもにとってのよい経験と、学生にとっての良い経験の両方が保障される。ゆったりとした時間の流れの中で、自然に生じる偶発的な事象に出会えることが多くなる、ということである。

さて、このようなとことこキャンプの流れの中であって、子どもの前に突如として現れるのが、ヒキガエルである。このヒキガエルは、アズマヒキガエルという種類で、森林環境内に多数生息している。森林内では目立たないので子どもに発見されることは少ないのであるが、炊飯棟などのコンクリートの上では非常に目立ってしまうため、その姿を見た子どもたちに、たちまちのうちにつかみ取られている。

## ② 事例1 ヒキガエルになった！？

雨天時のキャンプで、炊飯棟の屋根の下に、多くの子どもたちが集まっていた。雨が上がり、日が差してきた時に、1匹のヒキガエルが子どもたちの前に現れた。そして、炊飯棟の軒下から、森に向かって、ぴよこたん、ぴよこたん、ぴよこたん、ぴよこたん、……と、ゆっくりとしたリズムで移動を始めた。それを見ていたA太郎は、四つ足でカエルのようなポーズをとり、ヒキガエルの動きに同調して、ぴよこたん、ぴよこたん、ぴよこたん、ぴよこたん、と、カエルのように跳ねて、ヒキガエルの後を追っていった。A太郎はしばらくの間、跳ねてヒキガエルを追跡していたが、ヒキガエルが藪の中に消えた後、満足そうな表情で立ち上がり、目をキラキラさせて炊飯棟の軒下に駆け戻ってきて、キャンプカウンセラーの学生に「今、カエルを追いかけてきた！」と、息を弾ませて言った。

## ③ 事例2 ヒキガエルの鼓動

野外活動センターの職員が、夜の見回りに訪れた際に、ヒキガエルが現れた。その職員が、ヒキガエルを手に取り、「こうやって持ってみると、ヒキガエルの鼓動がわかるよ」と、教えてくれた。恐る恐る同じようにしてみると、確かに、指先に拍動が伝わってくるのを感じた。

## ④ 事例3 ヒキガエル行列

(とことこキャンプで毎年繰り返される光景に、「ヒキガエル行列」がある。これは筆者が名付けたものであるが、どのようなものかという点、以下のような場面である。)

大きなヒキガエルを手にしたB次郎が、何人かの子どもを引き連れて、キャンプカウンセラーの学生の眼前に、ヒキガエルを突き付ける。キャンプカウンセラーは、「きゃー、やめてー！」と叫び、あからさまに嫌がる様子を見せる。そうすると、B次郎はますます勢いづき、ヒキガエルを学生の顔により一層近づける。周囲の子どもは、この二人を取り囲んで、面白がっている。

しばらくの間、そのやりとりが繰り返された後、B太郎たちは勝ち誇ったように雄叫びを上げて去っていく。B太郎とヒキガエルを先頭としたその行列は、森の中をにぎやかに叫びながら行軍した後に戻ってきて、他のキャンプカウンセラーが次の餌食になる、ということが、繰り返されるのである。

## 3) 生物は相互に独立した存在であるがゆえに共振する

事例1では「A太郎はカエルになっているともいえるが、当然ながらA太郎はカエルではない」という事実がある。ヒキガエルは森の中へと消えていったが、A太郎は藪に阻まれて、人間の世界に戻っている。また、事例2では「人間に心臓があり鼓動があるのと同じように、当然ながらヒキガエルにも心臓があり鼓動がある」という事実がある。この出来事以前には、筆者は森の中で毎回毎回ヒキガエルを目にしていながらも、率先してヒキガエルをつかまえてみるなど全くなく、当然ながらヒキガエルの鼓動や体温について思いを巡らせることなど微塵もなかった。事例3では、B太郎とキャンプカウンセラーの学生との間で、ヒキガエルの意味付けが違い（B太郎にとってヒキガエルは親しみのある存在であるが、学生にとっては恐怖の対象である）、同じ生き物であっても人によって感じ方が異なるということが、子どもたちにとって明確に理解されている。ここでは、B太郎の「ヒキガエルを顔にくっつけようとする」という行為により、キャンプカウンセラーの学生の感情表出が拡大されて、その場にいる子どもたちが喜んでいいる。学生は心の底からヒキガエルが接近するのを嫌がっており、見ていて残酷な感じもする。しかし、ただひたすら嫌がるという学生の誠実さに、筆者はただ心を打たれるばかりである（もしかしたら学生は、「なぜ筆者は止めてくれないのだろうか」と、心の中で恨めしく思っているのかもしれないが）。なぜ筆者は止めないのか。それは、B太郎たちの行為が、自分自身とキャンプカウンセラーの学生との間に特別な関係を作るための適応的行為であると考えているからである。

これら3つの事例は、どれもヒキガエルに関連した話であるという共通点があるが、それ以外にも「生物は相互に独立した存在である」ということを示している。子どもとヒキガエルとの境界、人間とヒキガエルとの境界、子どもと大人との境界は、厳然と存在する。しかし、その境界があるがゆえに、人間は相手の側に気持ちを寄せて、身体レベルで共振することができるのではないだろうか。生物の根本的性質として、自己と非自己を明確に区別する性質がある。生物である限り、そう簡単には、自分以外のものと溶け合ったり混ざり合ったりすることはないのである。しかし、境界が明確であるからこそ、動きのやり取りや共振によって、相手という存在を確認することができるのではないか。また、触れるということは、自分も相手も同時に触れているということであるが、自己と非自己が明確に区分されていることによって、これも可能となるのである。

野外教育の教育効果の原点といえる体験のひとつに、自然環境の中で洞察を得る（気づきを得る）ことが挙げられる。先述の表1で、「身体が何かを確かに受け取り、意味生成や洞察につながる体験」について触れたが、本事例を通して、自然環境の中で、自己の身体と他者の身体が、ヒキガエルという生き物を介して洞察を得る体験の具体例を示すことができた。端的には、他の生物と同じ動きで探索・遂行することで環境を感受する体験（事例1）や、他の生物から生物としての同質性を感受する体験（事例2）や、他の個体との間で表出された感情を感受しあう体験（事例3）であり、ヒキガエルという生物についての理解というよりは、自己の存在や他者の存在への洞察につながる体験と考えられる。

#### 4) 子どもと環境を生態学的にとらえる 安定した環境要因としての「身体」

無藤（1997）は、保育の生態学的アプローチを紹介する論考の中で、子どもをめぐる環境の安定的な特徴の重要性に触れている。具体的には、自然環境を第一の安定要因として指摘し、もうひとつの重大

な安定要因として「子どもの身体」に言及している。これは、人の身体を使ってかかわる、身体を基点としてかかわる、ということであり、生物としての適応能力の発揮である。生物は、他の生物との相対関係で、バランスを保っているが、これは生態学の基本的な考え方である。物事を機械論的に考えると、インプットとアウトプットの1対1対応が基本だが、物事に生物の論理を含めると関係論的になり、偶然による自由度が生じるところがおもしろい。つまり、環境に対する生物の適応という観点を導入すると、主体性の中に柔軟な部分が生じる。これは、共主体 (co-agency) すなわち「他者と協働して発揮される主体性」に通じる柔軟性であり、人間が持つ生物としての特性に基づき、自然な主体性の発揮であるといえる。

## 5. 終わりに

本稿の目的は、生物と人間との関係の在り方から、野外教育の源泉としての「自然」についての考察を試みることであった。幼児を対象としたキャンプ「とことこキャンプ」での、他の生物と同じ動きで探索・遂行することで環境を感受する体験 (事例1) や、他の生物から生物としての同質性を感受する体験 (事例2) や、他の個体との間で表出された感情を感受しあう体験 (事例3) として、自然環境の中で、自己の身体と他者の身体が生き物を介して洞察を得る体験の具体例を示すことができた。また、幼児の原体験的自然体験の中で、人の身体を使ってかかわる、身体を基点としてかかわるという行為が、生物としての適応能力の発揮であるという考察に至り、野外教育の源泉としての「自然」の理解に「適応」の観点を導入するという着想に帰結した。今後は、幼児の原体験的自然体験について、生態学的な観点での考察を深めていきたい。

## 文 献

- 1) 遠藤知里 (2023) 野外教育の源泉としての「自然」について考える. 常葉大学短期大学部紀要, (54). pp.3-11
- 2) 土方圭, 張本文昭 (2023) 野外教育における野外学 シン・野外教育の木 2023ver. 日本野外教育学会第26回大会.
- 3) マイケル・トマセロ (2023) 行為主体性の進化: 生物はいかに意思を獲得したのか. 白揚社.
- 4) 無藤隆 (1997) トポスにおける発達 (第12回): 原体験としての幼児期. 幼児の教育, 96 (2), 20-28.
- 5) 白井俊 (2020): OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来: エージェンシー、資質・能力とカリキュラム. ミネルヴァ書房.
- 6) ヤーコブ・フォンユクスキュル, ゲオルク・クリサート (1995) 生物からみた世界. 岩波文庫.